「愛によって歩む」

ローマ１４：１３－１９

堀田修一　２４・９・１５

Ⅰ　キリストが代わりに死んでくださったお互いをさばかず愛し合って歩む

１.「こういうわけで、私たちはもう互いに（意見が違っても人格を）さばき合わないようにしましょう。いや、むしろ、兄弟に対して妨げになるもの、つまずきになるものを置くことをしないと決心しなさい」：１３。「さばき合わない」とは、他の人々の信仰のあり方、考え方、意見が違っても人格まで攻撃するような破壊的な批判をするのではなく、建徳的に人格と意見を分けて判断し合うことです。まず、妨げになるもの、つまずきになるものを置かないことを決心しなさいと語られる。「妨げになるもの」とは、他のキリスト者の信仰の障害となるもの。「つまずきになるもの」とは、他の人々を罪の中に落とし入れる誘惑のわなのこと。これらを、互いに主の愛で愛し合い、信仰の妨げやつまずきを互いに与えないように祈りましょう。※「つまずいた」と先に言う人こそ、多くの人を傷つけている面もあることも覚えたい。

２.「私は主イエスにあって知り、また確信しています。それ自体で汚れているものは何一つありません。ただ、何かが汚れていると考える人には、それは汚れたものなのです」：１４。「それ自体で汚れているものは何一つない」という意味は、すべての食物をきよいとされた主の教えの基づくことであり（マルコ７：１４－１９）、またパウロ自身が体得したこと（Ⅰコリント８：４－６）。「ただ、何かが汚れていると考える人には、それは汚れたものなのです」とは、宗教的意識や感情の領域があり、それぞれ、信仰的な生き方を決定する習性があるということ。主は、その宗教的な習性を越えた真実を語られた＝「外から人に入って来るどんなもの（食物）も、人を汚すことができません。…こうしてイエスは、すべての食物はきよいとされた。イエスはまた言われた。「人から出て来るもの、それが人を汚すのです。内側から、…人の心の中から、悪い考えが出てきます。淫らな行い、盗み、殺人、姦淫、貪欲、悪行、欺き、好色、ねたみ、ののしり、高慢、愚かさで、これらの悪は、みな（心の）内側から出て来て、人を汚すのです」（マルコ７：１５－２３）。パウロは、宗教的な習性を越えた主による自由の境地で生きています。しかしパウロは、自分と違う考え方をする人を拒否せず、その人々の人格を大切にしているのです。

Ⅱ　キリストの愛をいただいて愛によって歩む

１.「もし、食べ物のことで、あなたの兄弟が心を痛めているなら、あなたはもはや愛によって歩んではいません。キリストが代わりに死んでくださった、そのような人を、あなたの食べ物のことで滅ぼさないでください」：１５。食べ物のことや信仰的なあり方、考え方で、他のキリスト者を傷つけたり悲しませたりすることは、真実の愛がない行為です。「たとえ私が預言の賜物を持ち、あらゆる奥義とあらゆる知識に通じていても、たとい山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、（神と人への）愛がないなら、私は無に等しいのです」（Ⅰコリント１３：２）。

２.「キリストが代わりに死んでくださった、そのような人を、あなたの食べ物のことで滅ぼさないでください」。私たちは、自分と他の人を見る時に、お互いに、キリストがすべての人の罪の

為に十字架で代わりに死んでくださったほど、主に愛され高価で尊い人だと自覚したい。冷たい目でなく、主の愛の目で自分のことも、他の人のことも見たい。その様なお互いを、食べ物（非本質な事、どちらを選んでも良い考え方）のことで、さばき合い滅ぼす（傷つけ、つまずかせる）ようなことをしないように祈り、考え方、意見が違っても、人格を受け入れ合い、主にある一致を保ちましょう。「謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び、平和の絆で結ばれて、御霊による（教会の）一致を保ちなさい」（エペソ４：２，３）。意見の違いがあっても人格を受け入れ合う一致は、キリストの十字架の死の先行的恵み、愛があるから可能なのです。私たちが生きる中で、聖書が明確に語っていない事で、意見が分かれるのは当然のことです。その時、主に祈り愛をいただいて、意見が違っても対話をし、歩み寄り、主の愛をいただいて人格を受け入れ合いましょう。「愛されている子どもらしく、神に倣う者（人を愛する者）となりなさい。また、愛のうちに歩みなさい。キリストも私たちを愛して、私たちのために、ご自分を神へのささげ物、またいけにえ（私たちの罪の代わりの償いのいけにえ）とし、芳ばしい香り（神に受け入れられる）を献げてくださいました」（エペソ５：１，２）。

３.「ですから、あなたがたが良いとしていることで、悪く言われないようにしなさい」：１６。私たちが良いとしていること、考え方、意見が、悪くとられ中傷的な噂の機会となったり、さばき合う原因とならないように気を付け、祈りましょう。

Ⅲ　私たちが追い求めるべきもの

１.「なぜなら、神の国は食べたり飲んだりすることではなく、聖霊による義と平和と喜びだからです」：１７。神の国（神の支配、神が支配される領域）の本質的内容は、主の教会（主が御支配され、主を中心に互いに仕え合う共同体）のあり方を規定します。神の国の本質は、飲食という日常的な事柄ではなく、もっと本質的・根源的なものです。神の国の本質は「聖霊による義と平和と喜び」です。

①「義」とは、主を信じる者が主の義（罪のない）の衣を着せられ、神の前に義と認められ、神と正しい関係になるという義です。主の十字架の恵み、愛を信じる人に主の義の衣が着せられ、神との正しい関係の回復、和解が生まれると、主にあって人と人の正しい関係の回復、和解も生まれます。

②「平和」も、主の十字架の恵みを信じると神との平和な関係、和解が生まれると同時に、主にあって人と人との平和な関係に現わされていく平和です。証し：主を信じないで５０年の人生を送っていたなら？自分の思い込みの正義感で自分の罪を棚に上げ多くの人をさばき、争っていた人生だったでしょう。しかし今→「ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対する神の恵みは無駄にならず、…多く働きました（神の恵みで）。働いたのは私ではなく、私とともにあった神の恵みなのです」（Ⅰコリント１５：１０）。「キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのもの（ユダヤ人と異邦人。ローマの教会もユダヤ人と異邦人のキリスト者の考え方の違いがあった）を一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し、さまざまな規定から成る戒めの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現し、二つのものを一つのからだ（主のからだなる教会）として、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました」（エペソ２：１４－１６）。聖霊による実、心の義（誠実）、平和（平安）、喜び。

③「喜び」。神に愛されている喜び。神に救われすべての罪が赦され永遠のいのちをいただいている喜び。自分が出来る機能が衰えても、神は変わらず私の存在（高価で尊いと）そのものを喜ん

でくださる喜び。

２.「このように仕える人は、神に喜ばれ、人々にも認められるのです」：１８。このように、聖霊による義（誠実）、平和、喜びをもって神と人に仕える人は、神に喜ばれ、人々にも認められます。

３.「ですから、私たちは、平和に役立つこと（聖書が明確に語っていないことで、意見、考え方が違っても、さばかず見下げず、人格を受け入れ合う平和、教会の一致を保つ平和）と、お互いの霊的成長（教会の霊的成長。教会の主にある一致と教会形成の成長）に役立つことを追い求めましょう」：１９。

祈り：聖書に記されておらず自由な判断が許されている食物や日の暦等の判断で意見が違うお互いを、さばかず受け入れ合い神の愛をもって互いに仕え合い教会の一致を保ち霊的に成長し続ける者として下さい！